ビル新聞

株式会社ビル新聞社
本社
〒145-0062
東京都大田区北千束2-20-7-406
TEL.03(3729)7595
FAX.03(3729)7617
購読料　月：2,263円
年間：25,715円
発行　毎月3回　月曜日
http://www.bilshinbun.com/

迎春
ビル新聞社のハンドブックは今年も皆様の強い味方です
お問い合わせは・・・・・
03(3729)7595まで
HPからも申込みができます
www.bilshinbun.com/

主な内容

1面～3面　新春スペシャル対談
星野仙一 vs 伊藤英明「東北を元気に!!」
4面～8面　各種団体・企業　年頭所感・年頭訓示ほか
9面～12面　一般ニュース・平成30年度建築保全業務労務単価ほか

謹賀新年
2018

東北を元気に!!

チームと建物におけるメンテナンスの重要性

新春スペシャル対談

東北楽天ゴールデンイーグルス取締役副会長
星野仙一 × 伊藤英明
全国ビルメンテナンス協会・東北地区本部長

司会・松林善一　構成・前田恵　写真・小池義弘

あの日から間もなく丸７年が経つ。2011年３月11日、東日本大震災。奇しくも同じ年、一人の男が東北の地に降り立った。星野仙一、東北楽天ゴールデンイーグルス監督就任。入団会見の席で“燃える男”は「東北を熱くする」と宣言した。その言葉通り、就任３年目の2013年には球団史上初の日本一をチームにもたらした。その東北を熱狂の渦に巻き込んだ闘将と（公社）全国ビルメンテナンス協会で東北地区本部長を務める伊藤英明氏（一社・岩手県ビルメンテナンス協会会長）が、チームと建物のメンテナンスについて大いに語り合った。

この7年間で東北六県に根付いた「東北楽天」

――今年の３月11日で、東日本大震災から丸７年になります。改めて震災当日を振り返っていただけますか。

星野　僕はあの時、（東北楽天の監督として）兵庫県明石市で千葉ロッテとのオープン戦の真っ最中でしたね。ベンチがザワザワ、ザワザワし始めたんです。試合に負けているのに、「お前ら、何やってるんだ、集中しろ！」と言ったら、マネジャーが飛んできて、「東北が大変なんですよ」と。そこで審判に状況を説明し、試合を打ち切りにしてもらいました。まずは選手全員の家族の安否確認からでしたね。しかしあの年は、選手が野球をやる気になるような状態ではありませんでした。ウチの会社も選手もボランティア精神が旺盛なものですから、シーズン中も午前中から小学校、中学校へ慰問に向かい、昼過ぎにグラウンドへ来て、夜は試合。勝てるわけがありません。２年目もまだ、震災の影響は拭い切れませんでしたね。

伊藤　私は東京におりましてね。丸の内の高層ビルが大揺れに揺れて、「これはもう、すぐ盛岡に帰らなくては」と思いました。東北が被災地だとは思わなくて、テレビを見て初めて震源が東北とわかりました。結局、２日間東京に足止めされ、ようやく秋田回りの飛行機で帰りました。会社（㈱盛岡総合ビルメンテナンス）も自宅も（内陸部の）盛岡ですのであまり被害はなかったのですが、沿岸部在住の従業員もいるし、出先の会社もある。その安否を確認して回りました。大変だったのは、給料日が間もなくだったこと。振り込みができず、３カ月ほどかけて一人ひとり、手渡しして歩きました。

星野　慰問に訪れた先々で、津波の生々しい話を聞きました。一昨年も（宮城県）名取で語り部の女性に会いましてね。お聞きすると、ご自分の息子さんも流されている。もう涙も枯れ果てたんでしょう。涙一つ流さず、淡々と「ウチの息子はこういうふうに流されて、お姉ちゃんはたまたま学校にいたから助かった」とおっしゃるんです。そんな話を聞いていたら、こちらも涙が出てきてしまいました。

新津春子の

おもてなしビルクリーニング

#48

これからも、自分ができることすべてにチャレンジしていきたい！

あけましておめでとうございます。今年もこのコラムを担当させていただくことになりました。引き続き、よろしくお願い致します。

さて昨年を振り返ると、本当にいろいろなことがありました。あちこちに講師や指導員として招かれたり、本を出したり。清掃業務そのものからは完全に離れ、社内での仕事はスタッフへの指導や新しい資材のテストにとどまりました。

ターニングポイントとなったのは、２０１５年にＮＨＫの『プロフェッショナル　仕事の流儀』というテレビ番組に出演したことでした。その前は、頑張ったら社内で評価される程度の、普通の生活。しかし、このテレビ出演から自分の生き方がいっぺんに変わりました。といっても最初の１年は、周りのみなさんが持ち上げてくださる状態についていくのがやっと。２年目ぐらいから、自分が何をしていきたいか、今後どうやって生きていくか、自分の中で明らかになってきました。時間が経ち、やっと少しずつ、中身がついてきたということですね。

それまでは目の前しか見ていなかったのが、先々を考えられるようになりました。発想力が豊かになり、物事を幅広く考えられるようにもなりました。おそらく、自信がついてきたんじゃないかな、と思います。今は、可能なら自分ができることすべてにチャレンジしたい。チャレンジしたい対象も、圧倒的に増えてきました。

こんなふうに変わってきたのは、日本全国はもちろん、中国、台湾まで講演会に伺い、その講演先の企業で視察をさせていただいた経験によるところが大きいと思います。一つの会社の中にずっといると、時間が止まってしまうというか、一定の時間の流れしか感じることができません。しかし会社によっては、ドンドン進化し、時計の針を進めているところもあります。また、長所も短所も含め、「ウチの会社にはこういう人はいないな」「こういう考え方はしないな」と思うことも多くありました。しかし、何もかもが新鮮で、とても勉強になりました。

私が勤務する羽田空港にも、テレビ局などの取材はもちろん、国内他空港の関係者や他業種の方々が大勢見学に来てくださっています。清掃の大切さや、清掃の心を広く皆さんに伝え切れているか、初めは手探りでしたが、今は徐々に成果が出てきていると思います。これはさらに形を変えて、今後も続けていきたいですね。

今年は昨年に引き続き、週の前半３日間は所属する会社で次代の環境マイスターを育て、新しい事業の展開を考えていく。そして後半２日は、社外で講演や指導を行うといったペースになりそうです。

新しいアイデア製品も、ドンドン出していきたいですね。昨年は、〝万能お掃除クロス〟を開発し、一般向け書籍に特別付録として付けました。これをきっかけに家庭用、業務用共に考えてみたいと思っています。書籍も目標は今年２冊、来年２冊。私の中では、「こんな本を作りたい」というテーマは決まっていますので、出版社の方々に力を借りてやっていきたいと考えています。

多くの方々と出会い、お話し、そこで私が感じ取ったものを本にまとめていく作業は、とても楽しいものなんです。

新津春子氏略歴

1970年、中国・瀋陽生まれ。17歳で来日後、清掃の仕事に従事。1997年、全国ビルクリーニング技能競技会で最年少優勝を果たす。日本空港テクノ株式会社社員。羽田空港の清掃を主に手掛け、2015年４月からは「環境マイスター」として後進の指導にあたっている。

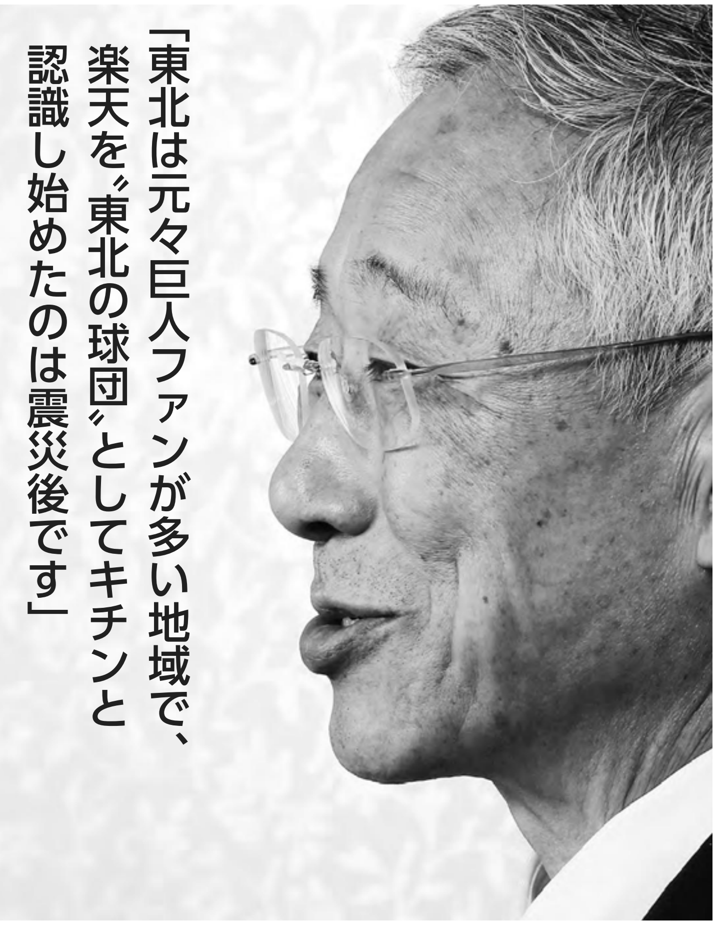
チームと建物における メンテナンスの重要性

新春スペシャル対談

東北を元気に!!

全国ビルメンテナンス協会・東北地区本部長
伊藤英明

東北楽天ゴールデンイーグルス取締役副会長
星野仙一



「東北は元々巨人ファンが多い地域で、楽天を"東北の球団"としてキチンと認識し始めたのは震災後です」

伊藤　私はあの年、慈善団体のライオンズクラブで東北の委員長をやっていたんです。震災後、本部から30億ほどの資金が提供されましたので、各市町村からの申請を受け付け、実際現地に行って1年半ほどいろいろな活動をしました。岩手のみならず宮城や福島にも行って、各地の惨状を拝見しましたが、福島は原発の事故が加わり、ひと際大変でした。

星野　あれはどうしようもなかったですね。我々も慰問を続ける中、避難所になっている体育館などに伺うと子どもたちはプロ野球選手が来たものだから、大喜びではしゃいでいるんです。その様子を見て、余計悲しくなりましてね。まだ現実を受け止めることのできない年代だったから。この子たちのために何ができるだろうか、俺たちのできることは野球で勝つしかない、勝って癒してあげるしかないんだ！と自分に強く言い聞かせていました。ところが選手はまだ、上の空でねえ……（笑）。（就任）3年目（2013年）に優勝ができたのは、運だけだと思っていますよ。

伊藤　変な言い方で申し訳ないんですが、東北は元々巨人ファンが多い地域だったんです。楽天を"東北の球団"としてキチンと認識し始めたのは震災後です。もちろん日本一は大きかったのですが、この7年間で宮城だけでなく東北六県に「東北楽天」が根付いたのは、星野さんをはじめそういった活動の賜物だと思いますよ。

星野　"おらがチーム"というんですか、やはりプロ野球はフランチャイズのある地域に密着していかなければならない。各地域の文化や気質も考えながら、チーム作りをしていかなければなりません。"東北"という名前をいただいた以上、東北六県にしっかり寄り添ったチーム作りをしていかなければならないのですが、地元出身の選手層の問題など、難しさもありますね。

伊藤　岩手では二軍の試合はあるけれども、一軍は年に1回あるかないかなんです。そこは何とかなりませんでしょうか（笑）。

星野　いやあ正直、あの球場（岩手県営野球場）では無理です。プロの興行をするには設備に問題がありますね。

伊藤　すみません（苦笑）。ただ、今、盛岡市で（収容人員）2万人規模の球場を造ろうという計画が進んでいるんですよ。

星野　いいじゃないですか！（笑）

伊藤　PFI（プライベート・ファイナンス・イニシアティブ＝公共施設等の建設、維持管理、運営等を民間の資金、経営能力及び技術的能力を活用して行う新しい手法）で、ウチの会社も参加したグループが計画を立てています。野球だけでなく他のイベントもできるよう、多目的なスタジアムになる予定です。でないと、議会で「年1回のプロ野球のために、ない袖は振れない」ということになってしまうので……。

星野　いや、その議会の考え方は間違っていますよ。プロ野球のためじゃない、地元の子どもたちや若者のために球場を建てるんじゃないんですか。少年から高校、大学、社会人まで使えるんだから。ましてや多目的なら、より幅広く地域の人たちのために活用できる。その中で「プロ野球も呼ぼう」ということですよ。

伊藤　そうですよね。今の球場はおっしゃる通りかなり老朽化が進んでいますし、何とか2年後には新球場の建設を始めたいと思っています。

星野　青森も弘前市運動公園野球場をリニューアルして、昨年ウチが約30年ぶりに公式戦を実施しましてね。青森の人はプロ野球に飢えていたようで、超満員になりましたよ。岩手も是非、超満員にしてください。

伊藤　はい、頑張ります（笑）。

星野　しかしねえ……被災者の方々の心のメンテナンスをキチンとしていかなければ本当の復興にはならないんだろうなと、あの光景を見て感じましたよ。

伊藤　私は自分がいい年齢になってきたこともあるのでしょうが、やはり若い人……子どもたちが希望だなという思いが震災後、特に強くなりました。震災後、希望を持てなくて魂が抜けたようになった60代、70代の人たちが周りに多かったんです。それを見るにつけ、やはり社会全体のパワーをアップさせるためには、若い人たちに次の担い手になってもらわなければ…と思いましたね。それでビルメン協会を通じて育成資金などを出し、若い人たちを応援し援助する事業を、細々ですが始めました。そんなふうに震災以降は、社会全体のことを見るようになってきた気がします。

「今年は強さを」と選手に訴えた2013年

――先ほど星野さんから"メンテナンス"という言葉が出ましたが、プロ野球界もビルメン業界も、まさにメンテナンスが大切な世界ですよね。

星野　僕はプロ野球界に入ってから、メンテナンスの重要性を実感しました。（中日での）1年目（1969年）、そこそこ活躍（8勝9敗）したんですが、若かったものだから「1年やったくらいなら大丈夫だろう」と、シーズンオフに遊び惚けて、翌春を迎えましてね。春のキャンプになったら、ヒジが痛くてどうしようもない。ハシは持てないわ、寝返りを打てば電気が走るわで、それから自分の体は毎日自分でケアしていかなければならないと思いました。

伊藤　星野さんの現役当時、トレーナーはいなかったのですか？

星野　今でこそ各球団に4人も5人もいますが、当時は1人だったんです。だから若い者のところには順番が回ってこなくてね。自分で口コミを聞いて街に出かけ、先生に診ていただくとかね。自分のお金でケアしていました。最近は自分で治そうという気がないのか、故障したら長いですよね。我々の頃とは違って暮らし向きもよくなったから、僕に言わせれば教育も含めて皆、甘いですよ。自分の身は自分で守らなければいけません。特にプロは誰も助けてくれない。自分の体は自分でメンテしていかなければ、長年野球はできません。

伊藤　今の選手はひ弱に感じますか？

星野　ただ、ウチの選手は粘り強いと思いますよ。寒い土地柄、キャンプが終わってからあちこちオープン戦に出向いて、開幕直前に仙台へ帰ってくる。丸々2カ月以上、地元に帰れないのは選手にとって大きなハンデです。僕はセ・リーグ育ちなものですから、ほとんどが東海道線内の移動。広島だけ、山陽線に入りますけどね。だけどパ・リーグは北海道（日本ハム）から九州（福岡ソフトバンク）まであるし、同じ関東でも所沢（埼玉西武）から幕張（千葉ロッテ）まで行かなければならない。パの選手は精神的にタフじゃないとできませんよ。それを何年も続ける強さがある。交流戦（の結果）を見たらわかるでしょう。

伊藤　確かにセ・リーグは少し情けない感じがしますよね。私も岩手の出身者が菊池雄星君（埼玉西武）、大谷翔平君（前北海道日本ハム、現ロサンゼルス・エンゼルス・オブ・アナハイム）と出てきてくれたこともあり、パ・リーグを見る機会が多くなりました。

星野　パは今、いい選手が多いですよ。まあ、メンテナンスに話を戻すと、阪神の監督に金本知憲が就いてから、体のメンテナンスについては非常に口うるさく言っているようです。腕周りを1cm太くしてこい、太ももを1cm太くしてこい、胸周りも3cm大きくしてこい、とか。シーズンが終わるとすぐ取り掛かり、ウエートもランニングも厳しいと聞いています。まあ今は皆、当たり前のことを"厳しい"と言うのですが…。

伊藤　確かにそうですねえ（笑）。

星野　だって野球でメシを食っているんだから。僕は、いつも選手たちに言うんです。「ユニフォームを着ている時間と脱いだ後の時間と、どっちが長いかといったら、脱いだ後の人生の方が長いんだよ。だから、今を大事に、自分を大切にしなさい」と。技術的なことは、すぐにはうまくならない。だけど頭とハートは違います。そこを前面に出して考えさせるよう、言葉なり行動なりで示しています。

伊藤　私の専門で言うと、建物のメンテナンスの基本は、「最良の状態を維持していくこと」だと思っています。それは会社も組織として、人間関係を含めていい状態を保つことに通じてきますね。メンテナンスという言葉の意味をまず明確に理解し、実行する。社員は常にそれを念頭に入れてほしいと思います。でないと、ただ仕事をこなす状態に陥って、星野さんがおっしゃった通り、なぜ自分が仕事をしているか忘れてしまいますからね。常に注意喚起をしていても、やはり楽をしたいと思う人の方が多いですから。

星野　ある程度厳しく言っておかないと人間、甘えがありますからね。「このへんでいいだろう」とか言っていては、我々の世界もテッペンは取れません。震災後、慰問に通いながら試合をしていた時はさすがに体力的に持ちませんでしたが、今も体力がない、心が弱い、と選手に指摘しているんですよ。昨年、夏以降にチーム成績がド～ンと落ちたでしょう。自分たちに何が足りないのか、キッチリ反省させなければいけません。テッペンを狙うには、心も体もしっかりケアしていかないと。

伊藤　震災の年が5位、翌年勝率を5割にして4位、そして監督就任3年目に日本一。あの3年目を迎えるにあたっては、星野さん御自身、手応えのようなものを感じておられたのですか？

星野　手応えというよりは、監督ですからね、強がりを言わなければいけない（笑）。「今年の楽天を舐めとったら大ヤケドするぞ！」って（笑）。開幕前、選手たちには言いましたよ。「この2年間で、お前たちの優しさは東北中の被災者に十二分に伝わった。でも優しいだけじゃダメだ。お前らがBクラスで、子どもたちに"頑張るんだよ"と言っても、"お前らもな"と言われたらどうするんだ」と。子どもたちはやはり、強いものが好きなんだ。本当の優しさは、強さを持ち併せないとダメなんだ。「今年こそは強さを見せよう」ということで、あの年は始まりましたね。

伊藤　開幕前、被災地の子どもたちに「日本一になる」と約束なさったそうですね。

星野　子どもたちを励ますつもりで言ったんですが、内心「日本一になるチームじゃないよな」と思っていましたよ（笑）。だけど戦っていくうちに、「これはもしかしたら、子どもたちとの約束を果たせるかもしれない」と思ったのが8月くらい。胴上げの時、子どもたちに「約束を果たしたぞ！」と言えたのはよかったですね。

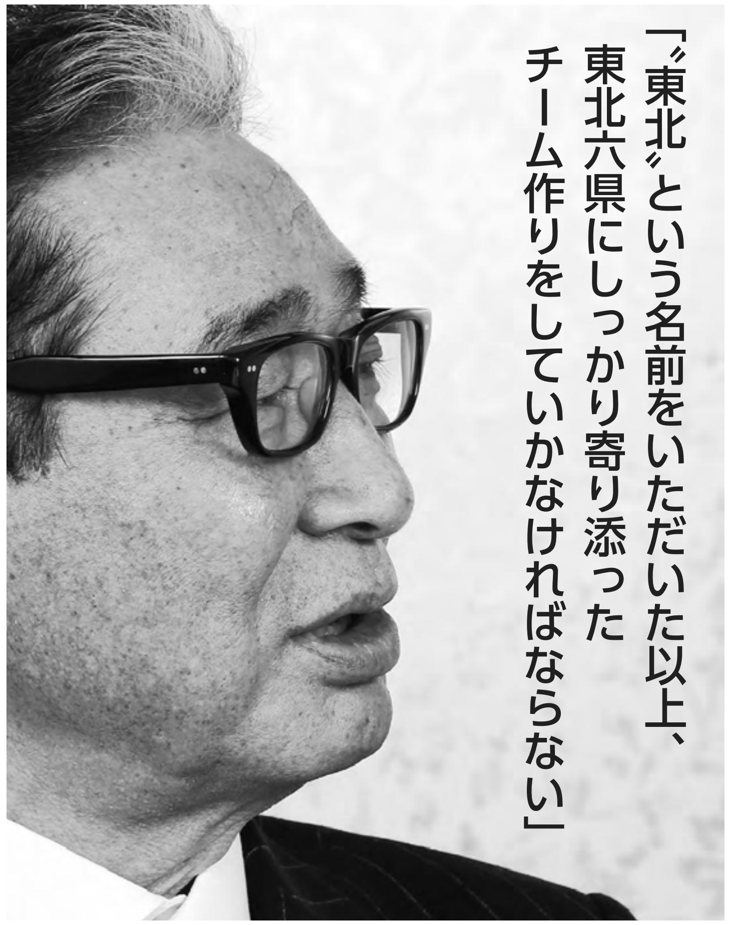
配慮はしても遠慮はしない 外国人との接し方

――今振り返ると、2013年の日本一はアンドリュー・ジョーンズとケーシー・マギー（現巨人）という現役メジャーリーガー2人の活躍も大きかったですね。

星野　当時、現役にしては破格の安い値段で来てくれましてね。2人とも人間的に素晴らしいナイスガイでした。彼らもホームラン1本打つといくら、といった形で震災被災者に義援金を送ってくれたんですよ。震災から3年目、「皆さん、悲しんでばかりじゃダメだ。何とか東北に花を咲かせよう」という見えない力が、ああいった外国人選手との出会いも含めて、日本一に向けて後押ししてくれたんじゃないかと思いました。

伊藤　外国人選手の使い方には、何か秘訣がありますか？

星野　やはりコミュニケーションでしょう。俺は英語ができないからとか、逃げていてはダメですよ。片言でもいいから一生懸命話していると、「ホシノは何を俺たちに言いたいのか？」が人間同士ですから伝わります。外国人選手と2人きりで、バッティング練習を見ながら話をしていたこともありますよ。多少わからない部分があっても、お互いこんなことを言っているんだろうな、と。やはり言葉も食生活も、文化も違うところから日本に来ているわけですから、遠慮はしちゃいけないけれども配慮はしてやらなければならない。そんな思いで常に外国人選手には接していました。楽天に限らず、過去に僕が監督をしていたチーム（中日、阪神）でも、外国人選手はよく働いてくれましたよ。



「"東北"という名前をいただいた以上、東北六県にしっかり寄り添ったチーム作りをしていかなければならない」

伊藤　そのへんの星野さんの気配りが違ったんでしょうね。

星野　僕は外国人と平気でメシを食いに行きますよ。焼き肉大好きだから（笑）。

伊藤　（笑）。ビルメン業界でも、主に東南アジアの方々が来て清掃やベッドメイクの仕事をしているんです。私は言葉も通じないし、彼らを管理監督、指導するのは大変だとばかり、自分の立場からしか物事を見ていなかったですね。彼らも異国の地に来て、文化や生活習慣の違いからくる不安感に包まれながら仕事に臨んでいるんだということに、もう一つ考えが至っていなかった。そのへんの配慮も必要なのだということを、今のお話で改めて感じました。

星野　要するに、声を掛けてやればいいんですよ。まず周りのスタッフが声を掛けてやる。「元気か？」「真面目にやってるか？」と、それでわかるんです。

伊藤　日本人の社員に対するようにやればいいんですよね、そこの部分は。

星野　そうそう。「こことここは、お前らに任せるから」ということを、僕はハッキリ言います。多少は日本人と違う扱いをしなければいけない部分もあるので、「配慮はするけど、監督として遠慮はしない」と自分に言い聞かせていました。そこは、ウチの選手も分かっていたと思いますよ。僕は外国人に対しても「バカ野郎！　走らんか、アホ！」とか怒鳴っていましたから（笑）。

伊藤　（笑）。我々の業界では、技能実習生として外国人が入ってきているんです。こちらから見ると主に後進国と言われる国から来るので、どうしても日本人スタッフが彼らを下に見る傾向があるんですね。私は、これは危険だなと思っています。ウチの会社も今年から技能実習を導入するので、日本人と同じ目線で接するように指導しています。

星野　今は相撲界で半分くらいが外国人ですが、あそこは下積みが長いから、通訳もつけずに日本語を覚えますよね。だけどビルメンの仕事はすぐ覚えてもらわなければいけないから、難しい部分があるでしょう。下積みを3年も4年もされたら間に合わないでしょうしね。そういった技能実習生は、技術的なところは全く白紙の状態で日本に来られるんですか？

伊藤　現地に学校を作ってもらって、そこで日本語や技能実習を半年ほどやってから来日するんです。一応高卒程度の学歴で、日本語は片言の状態ですね。

星野　でも、東南アジアの子は真面目じゃないですか？

伊藤　真面目で勤勉ですよ。

星野　そうですよね。しかし外国人に限らず、今の若者を教育していくだけでも、指導者は苦労しているでしょうね。僕らの時代は手が出る、足が出る、パワハラなんかふざけるなという時代（笑）。褒めて教えなければいけないのなら、興味を持つまで褒めていった方がいいですね。仕事や練習が面白くなるまでは、「こうやってみたらどうだ」というアドバイスを入れてね。褒め過ぎない程度にうまく褒めてやる。次に「できるようになったじゃないか」「お前も成長したな」と段階を踏んでいき、逃げられないようなレベルに来た時は、ガツ～ンと強く言っても大丈夫ですよ。

伊藤　こうしてお話を伺っていると、監督のお仕事というのは教育者とダブってくるところがありますね。教育者の顔もあるというか。

星野　と思います。今振り返ると、兄貴だったり、カミナリ親父だったり。母親の思いも伝えなきゃいけなかったこともありましたね。選手はいろいろな個所を故障しますから、多少医学的な知識も持っていなければなりません。学校の先生だとか心理学だとか、一応は本を読んで勉強しましたよ。東北に来る時も、東北の歴史の本を一通り読んできました。

野球離れや人手不足の解消は環境作りが大事

――野球で東北を、日本を元気にという思いを持っている一方で、星野さんは子どもたちの野球離れを危惧されています。折に触れ、「球界の危機」を口にされていますね。

星野　それは事実ですね。昭和30年代、40年代は、夜の7時になると、お茶の間に家族が揃い、親父がビールを飲みながらテレビの野球中継にかじりつく、という野球全盛期を我々は過ごしてきました。いい時代でした。その頃は「将来、何になりたい？」と子どもに尋ねると、真っ先に「プロ野球選手」という答えが返ってきたほどでした。今はSE（システムエンジニア）とかゲーム関連とか……。スポーツ選手は4番目くらいでしょう。なぜそういうことになったかというと、昔は公園で当たり前のようにお父さんと子どもがキャッチボールをしていた。今、そんな風景が見られなくなったのは、公園がキャッチボール禁止になったから。危ない、誰が責任取るんだ、と。すぐ誰かの責任論になってしまう。では、伸び伸びキャッチボールのできる環境を誰が作るのか。そこはプロ野球界に一番責任がありますよ。アマチュアが育てた選手をドラフトという名のクジ引きで、「いくらあげますから」と言って引っ張っていくだけで終わっている。それじゃあ、野球は発展しません。地道な活動で、子どもたちが野球をはじめとするスポーツができる環境を作り、原資を生み集めることを真剣に考えていかないと、プロ野球は存続してもレベルが下がってしまいます。教育は環境ですから、環境を作るのが底辺を拡大する唯一の方法。そこは私なりに構想も持っているので、そのうちキチッと発表したいと思います。

伊藤　少しニュアンスは違いますが、我々の業界も人手不足が大きな問題になっています。つまるところは、この業界に魅力があるかどうかというところだと思うんです。結局、働く人たちに魅力をアピールできるかどうかというところでは、ビルメン業界はあまり人気のない業種です。しかし、その中でも比較的求人に成功している会社もあるわけですから、やはり会社のムードや待遇など、働き手にとって魅力のある企業作りをすることによって、人手不足を解消していかなくてはならないと思います。プロ野球でも、球団に魅力を感じて入団することもありますから。我々にとっては少し遠回りでも、やはりそういった環境作りが肝心なんじゃないでしょうか。

【星野仙一（ほしの・せんいち）氏略歴】

1947年1月22日、岡山県倉敷市生まれ。倉敷商業高校から明治大学へ進学。1968年秋のプロ野球ドラフト会議で、中日ドラゴンズから1位指名を受け、投手として入団。82年に現役を引退した。現役引退後は、中日、阪神タイガースで監督を務め、それぞれリーグ優勝を果たした。その後、2008年には北京オリンピック野球日本代表監督も務めた。2011年からは東北楽天ゴールデンイーグルスの監督となり、就任3年目の2013年には球団史上初の日本シリーズ制覇を達成。現在は同球団の取締役副会長。現役時代の通算成績は146勝121敗34セーブ、防御率3.60。最多セーブ1回、最高勝率1回、沢村賞1回。監督としての通算成績は1181勝1043敗53分け、勝率.531。リーグ優勝4回、日本一1回。正力松太郎賞2回。2017年、野球殿堂入り。

――星野さんはボランティア活動にも力を入れていると聞いていますが、何かキッカケがあったのでしょうか。

星野　僕はある意味、野球でここまでしてもらった人間。野球のお陰ということを非常に強く感じていますから。20年ほど前に、（生まれ故郷の）岡山で車椅子野球を始めたんです。それが四国、山口、広島、島根、鳥取……とだんだん広がっていって、2001年から中国、四国、九州各地からチームを招待し『星野仙一杯争奪西日本肢体不自由児ティーボール交歓大会』を開催しています。それから、U－12世界少年野球大会へ『チームホシノ』を毎年派遣しています。アメリカの一般家庭にみんなでホームステイするんですよ。チームは昨年、2連覇を果たしました。さらに『ホシノドリームズプロジェクト』では、マイナースポーツを支援するほか、競技者だけでなく、スポーツビジネスを学びたい若者を、海外でのインターンシップに送り出しています。昨年、アジア太平洋ろうあ者競技大会400mハードルで、高田裕士選手が銀メダルを取りました。

伊藤　そうでしたか。アビリンピック（全国障害者技能競技大会）に、ビルクリーニング競技があって、ウチの協会もそこには力を入れているんですよ。みんなボランティアで行って、つきっきりで清掃技術を教えています。ただ、まだ障害者の雇用には依然として壁があるんです。私自身、障害者の兄弟が1人いて、小さい頃から色々と見聞きしていたものですから、極力障害者を雇用するように努めています。おそらく東北では、我が社はかなり雇用の多い会社だと思うのですが、なかなか社会を挙げての大きなうねりにはならないですね。未だに「障害者のスタッフをウチの会社にはよこさないでくれ」というような、社会の無理解がありますから。

――さて今年は、プロ野球界の大きな話題として、エンゼルスに入団が決まった大谷翔平選手に注目が集まっています。

星野　よそのチームの選手だったから、いらんことは言いませんよ（笑）。ただ振り返れば、ウチの岩隈久志（現在FA）、田中将大（ヤンキース）がメジャーへ移籍した時は、チームとしては非常に痛かった。しかし、若者が挑戦するというなら、それを私のような年寄りがダメだと言えんでしょう。チャレンジしたいなら、思い切ってやってこい、と言うだけですね。でも伊藤さんにしたら、岩手県民の大谷がメジャーに行くのは自慢になりますよね。

伊藤　岩手県民は皆、気合が入っていますよ。アメリカに行っても頑張って、日本にいた時と同じ投打の二刀流で是非とも成功してほしいと思っています。

――では最後に、今年の意気込みをお聞かせください。

星野　僕はイーグルスの話しかないんですが、昨年その気にさせておいて、7月終わりから8月にかけ、激落ししましたよね。そこをどうやって立て直していくか。選手とまた色々、侃々諤々（かんかんがくがく）やっていきますよ。野球では、白河の関から北に優勝旗が渡ったのはイーグルスが初めて。もう一度、東北の皆さんに夢を見させてあげたい、という思いですね。ただ、東北の皆さんは、全体的に優し過ぎるんだよなあ（笑）。

伊藤　そうですか（笑）。

星野　勝負の世界では、やはりファンもある程度厳しい方がいいんですよ。子どもの野球じゃない。我々、皆さんからお金をいただいて、高い給料をもらっているわけですから。「しっかりやれよ、バカ野郎!!」でいいと思います。高校野球までは、「お疲れさん、よく頑張ったね」でいいけれど。プロの世界では、「よく頑張ったね」なんて言われたらおしまいだと僕は思っています。だけどそれがまだ、イーグルスというチームには、はびこっているんですよ。僕は、それを拭い去る前に監督を辞めちゃったから。

伊藤　チームには、もっとプロ意識が必要ということですか？

星野　そうなんです。それがまだ、ウチには足りないですね。僕が監督をした中日、阪神に比べると、戦力的には一番劣っていましたからね。このメンバーで俺にどうせいっちゅうんだって思いました（笑）。だけどうるさく、うるさく言っていれば、何とか形になるもんだなあと思ったのが、13年の優勝でした。

伊藤　確かに星野さんは中日、阪神と、ファンの目が厳しいところでばかり監督をなさってきましたもんねえ。

星野　ホントですよ（笑）。ピッチャーがノックアウトされて、ファンから「お疲れ様」って拍手してもらっているんだから。ふざけるな、コノヤロー！　プロ野球なんだぞ、お前、何千万円もらっているんだよって思うでしょう。だけどそんなことを言っても、悪びれもしないし、反省もしない。なんか僕一人で闘っていましたね、そういう選手たちと。まあ、面白かったですけどね（笑）。

伊藤　私たちも、もっともっとプロ意識を高めていかなければいけないと思っています。プロ意識を持たせるのはなかなか難しいんですけどね。しかし、清掃にも各種の国家資格がありますから、それを取得させ、自己啓発しながらレベルアップしていってもらうよう仕向けていくのも我々の役目。何とかして意識改革をしていきたいですね。

星野　お前たちはこの道のプロなんだよ、ということを毎日毎日、言い続けていけばいいんじゃないですか。

伊藤　そうなんです。さっきからお話をお聞きしながら、ずっとそう思っていました。プロと言っても何千万円ももらってはいませんが、やはりそれで生計を立てている以上、それなりのプロになってもらわなければいけないと、キチンと話していこうと思います。